

## 田山君の死に就て

島崎藤村

田山君もまだそれ程の老年という訳でもなかつたし、あすこまで到達された長い経験と、老熟した筆と、朗らかな物状を見得る目とで、これからどんなおもしろいものが出来てくるだろうかと楽しみにして居りましたところへ、今度のような訃音に接して残念に思います。何しろ不治の病にかかられた事だし、癌の発生という事も数年前からその兆候を迫られたという事も聞きましましたし、脳溢血などが突然に発生したのも、矢張り癌の成長とか、血管の圧迫とかから来て居るといふことですから、六十歳を以てその生涯を終つたというのも田山君としては出来得る限りを生きたものであつたかも知れません。

一口に言えば田山君の臨終は非常に安らかな自然な最後を遂げられたので、加藤武雄君が都新聞にも書いて居られた様に大きな樹の倒れるように倒れて行かれた。しかし君の病というものは、主に口頭から咽喉へかけてであつて、頭を犯されたものでないから、最後の昏睡状態に陥るまでは意識は非常にハッキリして居た。私が十一日に訪ねて行きました時にも病床で色々な話が出まして、その時の君の言葉に『自分の死ぬのも今はもう時の問題になつて来た。何しろ自分は誰も知らない暗い所へ行くんだから、それも一人で行くんだから、そんなに心静かに此世を辞して行かれるわけのも

でもない。この気持はなかなか単純ではない』と言つて居りました。私はほんとうに面した一つの魂に直面した感じがしました。それから色々な話の出るうちに、そんなに話したら疲れてしようがないだろうと私の方で言う位でしたが、田山君は眼に一杯涙をためて居りまして、傍らにいた看護婦が拭いてやる位でした。あの時が私も田山君と言葉を交す最後の時でした。その時の模様は新聞の談話記事となつて出ましたから、読まれた読者諸君もあろうと思ひます。十二日の日は午前のうちには意識もハッキリして居られて、家族の人を呼ばれて色々話をされたそうですが、それが最後の別れをする積もりだったのでしよう。そうして午後にはもう昏睡状態に陥つてしまわれたのでした。

一体田山君は評判な□□で、良い事は良い様に、悪い事は悪いようにずんずん言われる様な人でしたから、多くは弟子ともいふべき人達の間には、時には意見の衝突もあつたろうし、感情の阻隔という事も間々あつたでしょうが、しかし私は君の臨終に際して、これ等の人における生前の感化の如何に深いかをつくづく感じた次第です。君は若い人達の世話が届かない様に見えていて自ら届いているのです。君の人となりの中には自ら知人や後進を惹きつける正直な所があつたようです。直接に君の教えを受けた人達の外、『文章世界』の誌上で多小なりとも世話になつたというような人達も、皆君の家に集つて没<sup>な</sup>つた後の事も色々

心配したり、葬儀、野辺送り一切の世話をしていた光景は見る者を感動させずには置きませんでした。

私の目に残る君の最後の面影は短かくした髪が銀のように白く眉の中にも二三白い毛が目についたあの毛深いたくましい手も細く痩せ、頬から口のあたりへかけてはさすがにやつれては居りましたが、それでも雄健な額と男性的な感じのする鼻とには六十年の苦闘を語るかの如くにも見えた。田山君は右の耳の所に大きないぼがありましてあの肉の塊りも私には忘れられないものの一つです。君の死のマスクは荘厳な式場の正面に飾ってありましたが私個人としては死のマスクというものはあまり好まない。死後は土葬にしてくれと言いつつ残したという事も田山君らしい。

葬儀の当日は風があつて少し埃の立つような日でしたが、私達は多摩の墓地まで棺を見送りましたあそこは松林の間を切り開いた新開の墓地で、ちょうど君の墓標を建てた後には一本の高い松の木もあり、四圍しゐは君の好きな武蔵野で、君が永眠の地には適ふさわしく思われる所でした。

君の長い文学生活については、私には殊に思い出が多いから色々語りたいがここには尽くせない。

(Y記)

※本文の表記は、できるかぎり常用漢字・新かな遣いに改めたが、表現上改めていない箇所もある。判読不能な箇所は□で表した。

※出典 「文藝時報」第136号(昭和5年5月22日発行)